万事

BANJI

土井田晩聖 句集

Toida Banseï

鵙の贄万事休すといふ形　晩聖

土井田晩聖という人物、俳号からして何か日論んでいるなと思った。パロディー精神旺盛な若者―と思って眺めていたら、予想に違わず本領を発揮。一言で言えば“危うきに遊ぶ”を実践している作家で、本歌取り、パロディーも確信犯、平然と行う。“同人にあるまじき句集”との御叱り、これこそ願ってもない逆讃辞、沢山届くことを期待し、首途の餞とする。

中原 道夫

いきなりの座礁なりしよ夢はじめ

天心の羽子ゆるゆると落ち始む

初夢に男が立つてをりにけり

探梅のいづれも影のうすき人

仕上がりし顔に受けたる雪礫

白線のうしろに下がり春を待つ

思はざるところに都忘れかな

嵐山より初蝶の吹かれ来し

風呂敷の大きすぎたる万愚節

石鹸玉知らぬ男についてゆく

のろのろと海市へ向かふ舟ひとつ

天心の月よりしだれざくらかな

たましひをふらここに置き忘れたる

本降りとなりたる夜の桜かな

竹の秋ひらひら落つる落し紙

半島に日のあたりたる暮春かな

青筋を立てて揚羽の止まりたる

切れ易く金魚の糞になりきれず

袋角おだやかな眼をしてゐたる

蹤きゆけば行き止りなり道をしへ

短夜の寝言に返事してゐたる

しづかなる余生蠅取紙のうへ

蛞蝓を這はせてみたき水面なり

萍のあはひみなもに雲流れ

一筋の雨まくまぎを貫通す

血の気ひくごとく舟虫失せにけり

店頭に四角四面の水を打つ

なけなしの財をなげうち虹を買ふ

片蔭を出で天竺にでも行くか

慇懃に先ゆづりあふ肝試し

手つかずまま熟れてゆく桃あまた

体腔の闇を洩らさず兜虫

雲海やおのが眼下におのが鼻

遺言のとぎれとぎれに蝉時雨

世を去るに心のこりの桃ひとつ

後朝の目にとまりたるおほへちま

蕪風にときどきしなふ雁の棹

やはらかきものを踏みたる無月かな

老眼や水面にうつる秋の風

あつまりてひとつとなりぬ芋の露

風呂敷をほどけば能登や鳥渡る

鵙の贄万事休すといふ形

冬に入る信号二つ目を右に

極上の尻に敷かるる十二月

黙祷の残り二秒の嘘かな

十二月八日の兄弟喧嘩かな

豆腐屋の角に来てゐる寒さかな

狐火の所定の位置に点りたる

身の丈もちやうどつりあふ雪女郎

溶けながら今をときめく氷柱かな

句集　万事（ばんじ）
平成十九年五月十五日　発行

著　者　土井田晩聖
発行者　小川　洋
印刷所　精興社
製本所　黒田製本所
発行所　富士見書房
〒一〇二―八一四四
東京都千代田区富士見一ノ十二ノ十四
振替　〇〇一七〇―五―八六〇四四
電話　営業部(〇三)三二三八―八五三一
編集部(〇三)三二三八―八五九五

© Bansei Toida 2007. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り替え致します。
ISBN978-4-8291-7632-0 C0092